

巡礼の近代性と物質性—四国遍路を事例に— Modernity and Materiality of the Henro pilgrimage in Japan

森 正 人
Masato Mori

This paper discusses the modernity and materiality of the religious, focusing upon the intertwining between the sacred and the mundane. The religious does not exist a priori: this is not only produced by the religious system and encoded a particular meaning, but also are always involved in the dynamics of sociability and materiality. It is driven by actors of stimulation and creation of mundane and religious meanings within the political connection of social actors' practices.

This paper focuses upon the henro pilgrimage in Japan to show the impossibility of distinction between mundane and religious affairs and the materiality of pilgrimage. The henro pilgrimage on Shikoku Island is one of the Buddhist pilgrimages in Japan. The pilgrimage involves visiting 88 sacred Buddhist temples and extends over 1,400 km. It is not associated with any Buddhist sect; hence, neither the pilgrims nor the 88 temples belong to a particular sect. In this pilgrimage, the objective is to visit all the sacred places related to Kobo Daishi, who was the patron saint of the Shingon sect in the religious sense and, as believed by inhabitants over the years, a folk saint transcending religious distinctions. In fact, this is not a stylish pilgrimage with sophisticated tenets, but rather a symbolic one based on the belief system of Kobo Daishi. A uniqueness of the pilgrimage is found in a fact that this pilgrimage has been on the rim of the Buddhist belief system because it just relates with the belief of the Buddhist saint Kobodaishi. While the Buddhism has developed various sects and denominations in Japan, the henro pilgrimage had not been included in the Buddhist system. This pilgrimage gained popularity among ordinary people around the early eighteenth century.

I illustrate three aspects of the henro pilgrimage in the early twentieth century, the 1930s in particular, to explore how lose meanings of the pilgrimage became anchored by agents. The 1920s witnessed a rise of a market of domestic tourism in Japan. Travel agents and transportation companies that connect urban and local areas filled a specific meaning of leisure into the pilgrimage, inviting tourists. A way of undertaking the pilgrimage is preferred as secure, speedy and joyful: the pilgrimage must be enjoyed. In the meanwhile an organisation which stressed the religious meaning of the pilgrimage was set up harshly criticising touristic style of the pilgrimage. The World War II required the pilgrimage to function as an opportunity for physical and spiritual training. The floating denotations and connotations within the pilgrimage had performatively been anchored by agents.

In the second aspect, an active and enlightening organisation, named Henro-Dogyo-Kai, was set up in Tokyo in 1929. The philosophy of the organisation Henro-Dogyo-Kai strongly accused the modern way of the pilgrimage of undermining its sacredness, while stressing the significance of walking pilgrimage because it insisted an effect of hiking to visit sacred places and historical places was found in recovering humanities through body practice in nature, and in understanding Japanese history discovered in local places. Hiking was a way to regain the nature of Japanese-nes.

I can observe the intertwining between the sacred and mundane in this process. Buddhism did not concern with the pilgrimage before the emergence of modernisation of the pilgrimage: the modernisation affected a sense of hate of the religious people and evoked their sense of the religion for the pilgrimage. The religious meaning of the pilgrimage is not pre-given, rather always yielded through mundane effects. Here, metaphysics assumption that lines a distinction between spirits and things is nullified by materiality in modernity of the henro pilgrimage.

1 はじめに

これまでの四国遍路研究の多くは、四国遍路に関わる個別具体的な事象や事例を詳細に検討してきた。それらは四国遍路の深い理解を提供する一方、四国遍路の検討をとおして、より広い議論と結びつける認識は強くなかった。しかし個別具体的な事象の検討は、四国遍路に関わる史資料がまだまだ手つかずのままに残されているときには強い意義を持つだろうが、有限であるはずのそれらの資料の発見がもはやそれ以上には望めなくなったとき、どのような意義を依然として持ちうるのだろうか。

他方、かつて新城常三（1964）が社寺参詣の社会経済史を論じるために四国遍路をふくむ巡礼を仔細に検討したように、巡礼をとおしてより抽象的な何かを検討するアプローチも考えられる。研究が学術的意義を持ちうるのは、おそらく個別の事例研究がより抽象的な議論の構築に貢献するときであろう。その意味では四国遍路研究が学術的研究となりうるには、四国遍路の事例が抽象化され、同じく抽象化された別の事例研究と同じ議論の俎上に上げられる必要がある。

この研究会が四国遍路と世界の巡礼を研究テーマに掲げるのであれば、なおさら四国遍路と世界の巡礼がたんに同じ巡礼であるという理由にとどまることなく、両者を比較可能にするための抽象化の作業が不可欠である。本論は現今の国際的な宗教学研究で四国遍路研究を有意なものとするために必要な理論的枠組みとして、近代性と物質性という問題構制を導入する。その二つを論の中心に据えたときに、四国遍路をどのように論じられうるのかを考えたい。

ここでは社会学者アンソニー・ギデンズ（1993）の指摘する17世紀おヨーロッパにみられた近代性の三つの側面、すなわち①時間・空間の切り離し、②「信頼」に基づく社会関係の切り離し、③再帰性を採用し、四国遍路においてそれがどのように現れてきたのかを試験的に考えてみたい。

2 時間-空間の切り離しと再編成

ギデンズによると中世においてコインの裏表のように共存していた時間と空間は、次第に異なる次元として捉えられていく。15世紀末からの大航海時代は未知の土地の「発見」の歴史であった。そして航海にともない集積されていく世界の知識は、理解可能な地球という認識を支えると同時に、空間の測量を促した。それにより時間もまた計測され、17世紀には時間概念を表現する単語が英語に登場し始める。こうして時間と空間は異なる次元として切り離された。

四国遍路においても、近世に作成された絵図に顕著なように空間と時間はともにあった。図1の地図は南北の方位が、北を上とする近代的な地図とは逆である。これは本州の巡礼者が自らの身体を基準として巡礼をイメージするとき、本州側を手前にして地図を持ち読図することから、地図の下部が徳島や

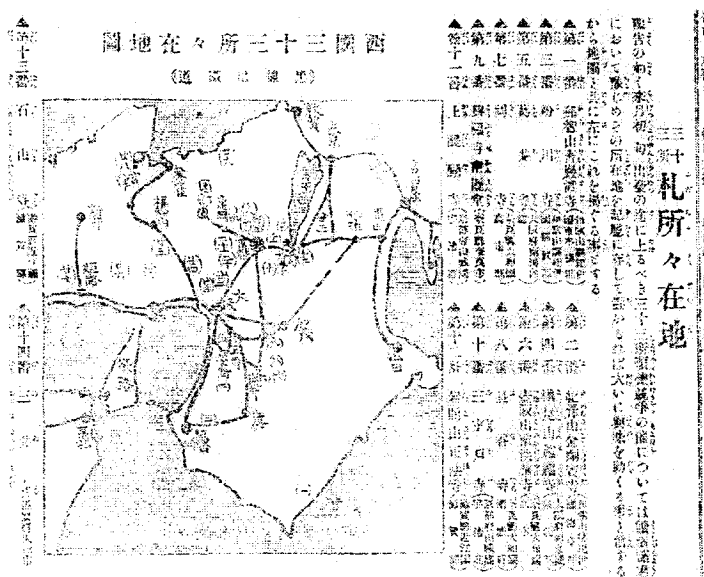


図1 大阪毎日新聞 1905年9月30日付

香川県となっていると考えられる。そのほか、地図で示される寺院間の距離が不正確である。これは、寺院間の正確な距離よりも身体が通過する村名や地名が重要となるためだと考えられる。すなわち、身体の時間的・空間的移動を前提としていると言えるだろう。

一方、1926年に徳島県の浅野総本店が作成した地図は、方位が近代的な地図の原則にのっとり、寺院間の相対的距離が正確であり、鉄道、道路などの交通情報が記載されている。四国遍路の巡礼空間が計測され、それにより移動に要する時間まで計測されていると言えるだろう。

近代における四国遍路の時間と空間の切り離しは案内記にも見てとられる。河村徳三郎『四国遍路道中記』（1886）には寺社間の距離のみが記載されており、移動に要する時間・空間の情報がない。それはやはり、巡礼中の巡礼者の身体移動と経験を前提としているからと考えられる。一方、安達忠一『同行二人四国遍路たより』（1934）には、距離や順路のほか、社寺間およびその周辺で訪問可能な名所や利用可能な交通機関まで記載されている。それは巡礼者の身体の時空間移動が客観的な基準で測定されており、なおかつ名所を紹介するということから、巡礼を「修行」とする考え方を客観視していると言えるだろう。

このように、近代において時間と空間がいったん切り離され、計測されながら近代的な巡礼空間が生産された。その端的な例として大阪毎日新聞社がイベント化した西国巡礼と四国遍路を検討したい。

1905年、大阪毎日新聞社は日露戦争後の読者獲得キャンペーンの一貫として、西国三十三カ所順礼競争を企画した。これは、2名の記者が巡礼者に扮し、大阪から正反対の方向へと西国巡礼を行ない、どちらが先に33の寺院を回り終えるかを競ったものである。そして1908年には「四国八十八ヶ所霊場遍路 空前の大快挙、紙上の好読物」として四国遍路が企画された。こちらは、高知県から2名の記者がそれぞれ反対の方向にスタートし、ふたたび2人が出会うまでどれくらいの日数がかかるのかを読者に予想させるものだった。

これらは巡礼に要する時間に多大な関心を示すイベントであった。1908年の四国八十八カ所巡礼の企画は、従来の案内記が正確な距離と時間を提示していないとし、巡礼に要する時間を「初めて世に発表」として勢い込んでいる。新聞記事では交通機関を利用する巡礼は「遍路の精神に追いついて面白くないとの非難もありまじやうが…時日の余りに長引くのを怖れて此を許した」（大阪毎日新聞1908年4月17日付）と、記者は時間の遵守と合理化のためにできるかぎり鉄道を利用した。

また、日本の国土に網の目のように張り巡らされた電信を利用して巡礼の様子を本社に伝えた。そもそも、新聞という媒体自体が、国土空間に情報のネットワークを張り巡らせるという意味で均質な国土空間の創出に貢献するものだった。西国巡礼の競争時には「読者は右記事の現はるゝ間は社交及び家庭に面白き話柄を作らるゝならん」（1905年10月1日付）とあるように、読者の対人関係をも刷新しようともしていた。空間的現象である交通ネットワーク、電信ネットワーク、そして新聞は、瞬時に特定の空間にある事物を媒介するメディアである。二つの順礼競争は、こうした近代国民国家に顕現する時間・空間の再編成、すなわち近代化のプロセスにおいて現れ得た。

公共交通機関をできるだけ用いた巡礼は新聞記者だけに見られるものではなかった。表1からは1907年の小林正盛以降、多くの巡礼者が積極的に公共交通機関を利用していることが見て取れる。しかも当初は船舶の使用が主だったが、時代を経るにしたがって列車や乗合自動車の利用が頻繁に行なわれている。このような公共交通機関は巡礼の空間的障壁を乗り越え、巡礼の簡便化と速度化をもたらした。

近代交通機関をできるだけ用いようとした雑誌『旅』の記者飯島実は「スピードの時代だ、歩くこと

それ自体が「行」の一つである四国巡拝も時代には逆はれぬ」（飯島1930, p. 425）と、歩いて巡礼をすることが「行」だという認識はあるものの交通機関を利用して時間を短縮する方法は避けられないと主張している。このような認識は飯島だけのものではなかったようだ。というのも、表には小林正盛や富田教純が交通機関を用いたことが示されている。小林はのちに真言宗豊山派の管主になった。富田はのちに遍路同行会を設立し、1930年代後半には徒歩による巡礼の重要性を強調し続けた。

表 1 巡礼者の巡礼日数と移動手手段の変遷

年	筆者	日数	巡礼者の移動手手段				計
			船舶	列車	自動車	その他	
1653	澄禅	91	6 (5)	0	0	—	6
1907	小林正盛	81	11 (3)	2	0	馬車 (5) 腕車 (1)	13
1918	高群逸枝	97	7 (6)	0	0	—	7
1926	富田教純	35	5	10	18	馬車 (1)	33
1932	宮尾しげお	18	7 (4)	13	28	ケーブル(1) 人力車	48
1937	萩原井泉水	18	3 (3)	16	23	ケーブル (2)	42
1938	三宅右一	36	5 (2)	18	19	ケーブル (2)	42
1941	橋本徹馬	34	6 (5)	19	20	ケーブル(2) 不明カ所	45

3 「信頼」に基づく社会関係の切り離し

ギデンズによると、かつての地域的な信頼関係に基づいた社会的諸関係は近代においていったん途切れ、二つの近代的システムをとおして新たな社会的諸関係が構築されるとする。その二つのシステムが、時間と空間を異にする両者間の相互交換を可能にする象徴的通標たる貨幣と、科学技術上の成果や職業の成果によって体系づけられた物質的・社会的環境専門家システムである。この両者が互いに見知ったローカルな社会関係を時空的にこえた新たな信頼関係を構築した。

四国遍路は宥辨真念の『四国辺路道指南』（1687年）以後、案内記が出版されてきた一方、大師講を基盤とした地縁的な巡礼ネットワークも大きな役割を果たしてきた。しかし、1920年代に出版され始めるガイドブックは従来の案内記とは異なる新たなガイドブックであった。

岡部茂太郎の『弘法大師霊場案内』（1921年）には

然ルニ昔カラ四国巡拝ト言ヘバ迷信家カ病人ノスルコトト思ワレテ識者ノ間ニ顧ミラレナイノハ実ニ遺憾ナコトデアリマス ソレデ私ハ大正八年春カラ自分自身デ四国巡拝ヲ実行シ且ツ以テ世ノ識者ニモ勸メテ居ルノデアリマス

とある。また門屋常五郎は

由来四国巡拝者と云へば、其の大部分が老少男女を通じて、農商の或る階級に限られ、概して教育程度も低きやの感がありましたが、近時は大分其の傾向を異にして、知識階級、有産階級と普遍的に参拝するやうになりました

と言ひ、1923年の『四国霊場案内』を、以前の「大同小異」の案内記とは異なり、知識階級の人々を強く意識したものであると自負する。そして、この案内記には交通機関が紹介されていた。

このように、1920年代初頭にはそれ以前とは異なる知識階級やインテリといった多様な人々が四国遍路に参入していたことがうかがえる。彼らは、以前の巡礼者のように地縁的ネットワークによって送り出されたのではなかった。それゆえ増加しつつある新たな種類の巡礼者に対して新たな情報提供が必要になったと考えられる。そのときに巡礼情報を提供するのには地縁的ネットワークにおける知己の先達だけではなく、新たな巡礼情報提供の専門家でもあった。近代における巡礼情報提供の専門家は、新たなマスメディアであるガイドブックや雑誌、そして新聞だった。ここでは旅行雑誌や新聞を検討し、この新たな信頼のネットワークではどのような巡礼情報が提示されたのか見てみたい。

雑誌『旅』5巻4号(1928年)から7巻1号に連載した記事をまとめて1930年に『札所と名所 四国遍路』として出版した元鉄道省職員で雑誌『旅』の記者、飯島実は自らを「無神論論者」とし、この巡礼の目的を「今まで一部の信仰本位の旅行者だけにしか為されてゐなかつたこの旅行科目を一般の遊覧本位、観光本位の旅行者のために開拓」(p.80)することに置いている。1934年3月の1934年3月、大阪朝日新聞社による「四国霊場新遍路」特集では普通の旅館に宿泊し、バス、鉄道、船舶などの乗物もできる限り利用する「モダン遍路」の巡礼方法が紹介され、1935年のJTBによる『旅程と費用概算』では、交通機関を利用し旅館に宿泊するモダン遍路のスタイルを「新式の方法」と描写している。

貨幣をとおした巡礼空間の生産は、1937年に南海電鉄が企画した四国八十八ヶ所出開帳のイベントでも顕著である。南海電鉄の発表として40万人の参拝者があつたこの出開帳では、宗教関係者を中心に、この出開帳の宗教的意義が強調されてはいたものの、実際には映画の宣伝、キャバレーの芸妓のパレード、縁日のような出店のほか、施餓鬼の押し売りやスタンプ押印の簡便化なども見られた。またデパートの高島屋では出開帳期間中に「お砂踏み」まで行なわれていた。こうして四国遍路は信仰をとおして生産されるだけでなく、貨幣をとおして商品化されていった。

1920年代初頭から四国遍路には従来とは異なる社会階層の巡礼者が見られるようになり、それにとともに新たな巡礼者のネットワークを形成するために新たな記述スタイルのガイドブックが現れた。それは新たな信頼のネットワークを形成する専門家システムの登場を意味する。そこで紹介される新たな巡礼方法は、一方で時間と空間を再び組み合わせることで近代的な巡礼空間を生産し、他方で巡礼の再吟味を促すものだった。

4 四国遍路の再帰性

1908年4月の大阪毎日新聞における四国八十八ヶ所巡礼の企画では、かつての巡礼者の必携品は時代遅れだとし、記者が旅行案内、巡礼路図、封筒、手帖、手ぬぐい観音経、念珠などを持参した。また紙上に掲載された記者の図は背広を着用しており、巡礼の衣装についても十分な吟味が加えられたことがわかる。

1908年には、記者のうちの一名が行なうことになる、札所番号を遡りながらの「逆打ち」巡礼についても検討されている。『大阪毎日新聞』1908年5月17日付の記事には、「案内の書物もなければ無論道に立たぬの石標もなく、這歴遍歴を遣た人間もないから四国の人間に尋ねたところで知て居る人もない」とし、逆打ちの可否について態度を保留したうえで、それを挙行する。ここではその判断の妥当性ではなく、判断にいたる過程を問題にしたい。すなわち、このとき逆打ちを所与とせず、案内記を読みながら検討したことに、因習に対する再帰性が認められる。

巡礼の行為の再帰性についてはより感覚的な次元のものもみられる。それが巡礼者の身体経験と視覚性の関係性である。かつて難所は巡礼者の身体を用いてゆっくりと乗り越えられるべきものだった。それゆえに、難所への畏怖の念と乗り越えたときの充実感が、巡礼において大きな要素となっていた。しかし、近代的交通機関の発達で難所を容易に乗り越えることを可能にした。巡礼道周辺の風景は移動行為だけでなく移動中の聴覚や嗅覚を含む身体経験から切り離され、純粹に交通機関からまなざされるものとなった。『遍路』の編集者である村上長人は1931年の巡礼日記において

急激な世態の変（新）遷は、四国にも種々の変化を見せまして、道路は益す開け、交通機関は発しまして、八坂八濱の陰を遊覧船の上より指呼し、坦々たる県道に自動車を停めて、音に聞く飛石、跳石、ゴロ石の難所を見物するといふ有様であります（村上1931, p. 5）。

と記している。難所の回避は、巡礼の風景の「外」で巡礼することを可能にし、難所の風景を顛倒させ審美化をもたらしたのである。

このような巡礼の近代化に対して、巡礼の宗教性を重視する立場から再度、再帰的に吟味が加えられていく。そもそも四国遍路は真言宗祖の弘法大師信仰に基づいているものの、真言宗からはあくまで民間信仰として捉えられており、十分な配慮がなされてこなかった。たとえば1930年代前半まで、真言宗主導で行われた密教研究の学術雑誌『密教研究』では四国遍路に関する論考はなく、『密宗学報』には一本の論考しか掲載されていない。つまり、巡礼は真言宗でまじめに取り組むべき学術的な対象にはほとんどなっていなかった。こうした状況に対して、「四国巡礼の組織は、我宗にとつて力強い信仰の一面であるが、現時の四国霊場に対して、何らの顧慮が払はれないのには驚く」という指摘が1931年にみられる。四国遍路の札所寺院でも巡礼者を冷たく扱うこともあったようで、戦前の巡礼記にはそれへの不満が記されている。1907年にのちの豊山派管長となる小林正盛と友人で繁多寺住職丹生屋東岳が霊場会設立を呼びかけるために四国遍路を行なったのは、このような真言宗における四国遍路の周縁的な位置を是正しようとするものであった。

真言宗という既成宗教と民間信仰の間に不安定に位置していた四国遍路は、観光や国家的イデオロギーという世俗的な事象に影響を受けることが多かった。交通機関を用いた楽で楽しい四国遍路はまさに世俗的な方面に強く引き寄せられ事例である。それに対して、1929年に東京都中野の宝仙寺に本部が置かれて設立された遍路同行会は活動の最終目標を四国遍路とし、そのために東京都内でパレードや講演会を行ないながら、真正な巡礼を強調する。たとえば同行会会長の富田教純は、1931年創刊の月刊誌『遍路』の1935年で次のように記している。

高尚なハイキング 人生の普遍的の行路と云ふが如き意味を持つて使はれて居る。御然るに今は遍

路と云ふ語は宗教的修行納経帳とは、或方面には乞食が飯の種にでもする帳面と心得て居つたが、今は 参拝の記念帖 修養の旅行帳 感謝の旅日記 と云ふような意味で、お納経判を頂いて居る。モダン達は菟印帖と名を改めて、寺々の御納経判を集めて得々として居る（富田1935、p.1）。

この言明は、「モダン」と自らの推進する四国遍路を対置させている。それは四国遍路のモダン化を再吟味し、四国遍路本来の宗教性を強調するものだった。

このようなプロセスは、そもそも仏教、民間信仰、世俗の重なる場に位置してきた四国遍路では、その宗教的な意義や価値が所与ではなく、むしろ世俗的な事象に強く影響を受けるなかで、再帰的にそれが確認されて強調されることを意味している（図2）。

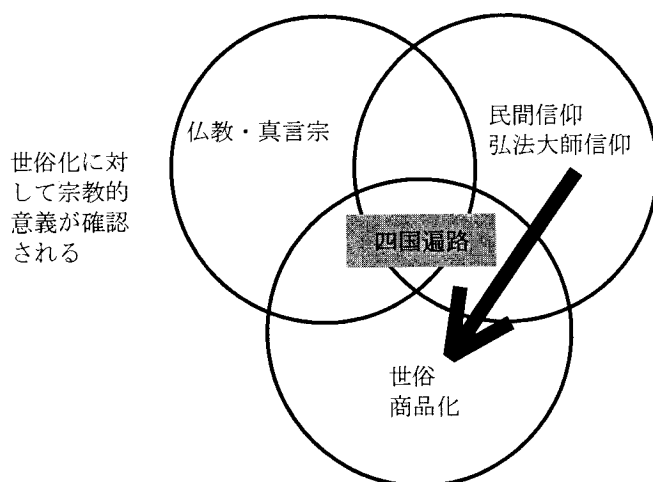


図2 四国遍路における宗教的意義の再帰的状况

では四国遍路本来の宗教性とはどのようなものだったのだろうか。遍路同行会は「大師遍路行列」を1931年から毎年、東京の府内八十八か所での遍路修行を一九三三年から毎月行なった。これらは最終的には四国遍路を行なうための修行であった。師降誕会遍路行列への参加者数は第1の1931年には200名弱であったが、翌年には600名強、さらに1930年代半ば以降は1000名以上と増加した。

この「大師降誕会遍路行列」では「正しい」四国遍路の巡礼方法が強調されていた。服装は「随意」だが、菅笠と金剛杖は「必携」であった。また、別のときには巡礼者の装束の「本式」とは、白の手甲、脚絆、サンヤ袋に、女性は下駄か「足袋はだし」、男性はわらじ履きであり、「迷古三界城」と記された菅笠と多宝塔形が刻まれた金剛杖を持つことであると記されている。弘法大師の身代わりである金剛杖が必携とされたことは、「正しい」四国遍路に対する強い認識がうかがえる。そしてこの出で立ちで行なわれる行進の様子は、次のように記されている。

モダン・スタイルの男女が帝都の街頭を横行してゐる時、敬虔なる「杖と笠」の遍路姿の行進は如何に对照の妙を極むることであらう（『遍路』1-6、1936年、p.8）。

ここで対比されているのは、本式の四国遍路の装束を身にまとった行進の敬虔さや身体性と、モダン・スタイルである。

徒歩での巡礼は、それが弘法大師の修行当時の経験を再現できること、また都市生活で疲弊した心身を再創造できることの二点で称揚された。たとえば、『遍路』編集人の村上長人は、

乗物禁止の教訓を裏切つて、乗物利用者の多くなつたに驚く、(中略) 遍路は大師の御修行の通りに修行するという旨意であるから、ポツポツと道を歩むのが札所の本尊に参詣すると同じ値を持つる。(中略) 徒歩でお参りをするといふ事は、大切な事故、相警しめて乗物巡拝の弊を止めたいと思います(村上1931, p.5)。

と、徒歩での巡礼が弘法大師の修行の追体験を可能にするために「大切」だと主張し、乗り物を用いた巡礼の自制を求めている。また、同じ『遍路』では、

人が一切の我執を去つて、弘法大師の導かれるまゝに、山を越え、壑を涉り、大自然の懷の中に抱かれながら、遍路の旅に上るとき、此の頭脳の中に堆積してみた塵埃は奇麗に拭ひ去られて、また生まれたときのまゝの、清浄無垢な頭脳となる(佐藤1931, p.5)。

と、徒歩での巡礼によって大自然の懷の中で清浄無垢な頭脳が獲得できると言われている。

このように、近代的な巡礼様式が広がるなかで、真正で神聖な巡礼様式が再吟味され、徒歩での巡礼が評価されるようになった。確認するが、徒歩での巡礼は近世においては所与であった。近代にそれ以外の移動手段が登場し主流になり始めたとき、徒歩巡礼の身体性の持つ価値が再帰的に確認され、強く主張されるのである。

とくに、遍路同行会による徒歩巡礼の強調は、宗教的な価値を唱えつつも、宗教的次元で完結していたわけではなかったことが重要である。というのも、その主張は1930年代の日本で拡大していた国民の体位向上と武運長久の祈願という名目を掲げる厚生運動と交差しているからである。そこでは健全な娯楽という考え方が国家的な事業の中に次第に組み込まれ、「健歩」がレクリエーションとして寿がれていたのである。1938年に「全日本徒歩旅行連盟」が発足すると、同行会長の富田は

我国には一千余年の歴史をもつ、徒歩信仰の遍路がある、新旧の札所、全国に普遍し、廣きは数県に跨り、狭きは、一寺の境内を出でず、脚の強弱にも、時間の多少にも、お好み次第である。真の肉体運動は、精神の修養に待つ。全国民を挙げて徒歩運動の効果を全ふせんとならば、先づ遍路道に学ばねばならぬ(『遍路』8-7、1938年、p.11)

と徒歩運動において四国遍路が果たす役割を強調していった。

高群逸枝の『お遍路』に序文を寄せた仏教運動家で東洋大学学長でもあった高島米峰^{べいほう}も、四国遍路が物品の欠乏に耐えるという点、徒歩旅行の奨励という点から考えても絶好の手段であり、学生の長期休暇に四国遍路をさせるということが、戦時の国策に沿うものだと主張をしている。戦前に禁酒・禁煙・廃娯運動を展開した高島は、四国遍路の禁欲性に関心を寄せたのであった。

さらに1940年に「皇紀二千六百年」の記念事業が終わり「新体制」が成立すると、遍路同行会による徒歩巡礼の強調はいっそう進んでいった。同行会会長の富田が1941年に、

世の中が歩け、歩け、歩けと叫ぶ時に本四国の遍路に出た人が歩かずに巡拝するとしたならば、遍路行者として無価値なるのみではない。世の中に対しても相済まぬことになる。(中略) 断然徒歩で遍路を決行すべきである(富田1941, p.1)。

と主張しているように、同行会は、徒歩で四国遍路を行うことを強制するようになった。

5 近代の不可能性

このような近代の四国遍路のありようをみると、そこには教義や信仰心が巡礼の実践や身体性を規定するのではなく、むしろ実践や身体性、あるいは世俗的事象が信仰心や教義を形づくっていくプロセスが見て取れる。四国遍路の近代性を観察することで、神によって造られ、その声に従う理性を持った人間主体は、自らの身体や事物といった客体と明確に区分され、かつ後者の上位に位置づけられる、という西洋形而上学的な前提は成立しえなくなる。

近年の欧米での宗教研究ではこのような人間生成の側面、すなわち、物質という客体が人間主体を作り上げていく物質性に大きな関心を払っている。2005年には雑誌 *Material Religion: the journal of objects, art and belief* が創刊され、2010年には David Morgan が *Religion and Material Culture: the matter of belief* を編集して刊行するなど、宗教的事象の物質性に関する議論は一定の蓄積を見ている。

ここでは信仰心や教義が一義的であり、儀礼や身体、宗教的事物がそれを支える二次的な客体とする考え、さらにはエリアーデが前提としていた聖と俗の二元論が棄却され、修行によって形成される宗教的身体性により信仰心が形成される過程や、イエスの視覚的イメージという疑似餌がむしろキリスト教的世界観を強化していく過程(Morgan, 1999)などに関心が向けられている。

こうした宗教研究の大きな転換は、欧米の人文学全般で見られる物質論的転回やポスト人間中心主義の動きの中にある(森2009)。そしてそれは近代の大きな物語を解体していくのである。アクターネットワーク理論を先導するブルノ・ラトゥールは、近代という時代が、人間/動物、精神/物質、主体/客体の二項対立を作り延命させてきたが、現実にはそうした二項は常にその中間にある構成要素(constituent)によって媒介されていることを取り出すことで、二元論的を前提とする近代のプロジェクトの不可能性を論じる。そうすることで、人間社会の複雑さだけでなく、真の政治とは何かを問いかける。

四国遍路においては、次のような諸前提が問題となる。つまり、仏教であれ民間レベルであれ、精神や理性に基づいた真言宗的あるいは大師信仰が先験的に存在する。そしてそれが下位に存在する巡礼そのものや巡礼空間、そしてそこでの巡礼者の身体を規定、規律化して巡礼行為をかたどる。そのなかでさらに巡礼に必要な菅笠や白装束などの巡礼用品が信仰を補完するものとして生産される。そして、それらすべてが信仰心の強化に貢献する、という考え方である。さらにそれとは別の次元で観光化や交通機関の利用といった世俗的現象が存在するという前提も問題となる。

四国遍路の近代性において露わになるのは、再帰的に巡礼用品として確認され、新たな信頼のネットワークを形成する宗教的事物、時間と空間を圧縮するための交通機関や娯楽としての観光産業という世俗的事象が巡礼に影響を及ぼし、巡礼空間、巡礼行為、そして巡礼者の身体をも作り上げていくこと、そしてそれにより宗教の教義や真正/神聖性までもが再帰的に確認を迫られていくことである。すなわち四国遍路の近代性のなかに、物質性が確認できる。

6 おわりに

本発表は、四国遍路研究を、四国遍路という枠組みを取っ払ってなおかつ国際的、学術的に議論をしていくために、どのような可能性があるのかを探るものである。もちろん、これまでの四国遍路研究が在野の研究者による地道な資料発掘によってなされてきたことを否定するつもりはまったくない。むしろ、専門の研究者がそうして蓄積されてきた四国遍路の資料はそこでの議論をどのように抽象化しながら、国際的な場、あるいは学術的な場に発信するかという努力をあまりしてこなかったことに反省点があるように思われる。

これから四国遍路と世界の巡礼地がどのように交差するのかを考えたとき、単に同じ巡礼であるという共通項だけを前提としていては、議論は早々に平凡化するかも知れない。むしろ、同じ巡礼であるという認識そのものが問われたり、あるいはそれぞれの巡礼が経験してきた歴史においてどのような共通項があるのか、という点が問われたりすることにこそ、四国遍路と他の巡礼の比較作業の有意性があるのではないだろうか。もちろん、それぞれの巡礼がそれぞれの国民の信仰心の発露であるという、それこそがいささか神がかった議論に陥らないようにすることも重要だと個人的には考える。

近代性や物質性という理論的枠組みは、そうした比較作業に有用であろう。また、研究成果を国際的な雑誌に寄稿するなら、現今の宗教学や人文学全般における動向を踏まえたものでなければ受理されがたく、やはりこれらの理論を道具として使いこなすことが肝要となる。

参考文献

- 飯島實 (1930) 『札所と名所 四国遍路』 寶文館。
- 岡部茂太郎著・出版 (1921) 『弘法大師霊場案内』。
- 岡宮自猛 (1931) 「四国霊場に就て」 『密宗學報』 2-8, pp. 521-522。
- 門屋常五郎 (1923) 『四国霊場案内』 門屋栄五郎。
- ギデンズ, A. (1993) 『近代とはいかなる時代か』 而立書房。
- 佐藤獨嘯 (1931) 「遍路は我等の精神を清浄無垢に返らせる」 『遍路』 1-1, p. 5。
- 新城常三 (1964) 『社寺参詣の社会経済史的研究』 塙書房
- 富田教純 (1935) 「遍路行進」 『遍路』 5-5, 1頁。
- 富田教純 (1941) 「歩け、歩け、歩け」 『遍路』 11-4, p. 1。
- 村上長人 (1931) 「四国巡拝所感」 『遍路』 1-7, p. 5。
- 森 正人 (2005) 『四国遍路の近現代』 創元社。
- 森 正人 (2009) 「言葉と物—英語圏人文地理学における文化論的転回以降の展開—」 『人文地理』 61-1, pp. 1-22。
- 森 正人 (2012) 「巡礼の近代性——一九〇五年の西国三十三所順礼競争」 人文論叢29, pp. 45-55。
- ラトゥール, B. (2008) 『虚構の「近代」』 平凡社。
- Morgan, D. (1999) *Visual Piety: a history and theory of popular religious images*, University of California Press.
- Morgan, D. ed. (2010) *Religion and Material Culture: the matter of belief*, Routledge.